

男女別学のすすめ

夏休み中の8月10日(火)に、東京の私学会館で『第1回男女別学教育シンポジウム』が開催され、行ってきました。この7月に『なぜ男女別学は子どもを伸ばすのか』(学研新書)を出版した中井俊巳氏が基調講演を行い、男子校の校長、女子校の校長、共学校ですが授業・HRを男女分けて別棟で行っている学校の校長ら5人でシンポジウムが行われました。

とても興味深い内容でした。講演によると、日本では10年前と比べると私立の男子校数は約4割、女子校数は3割減っているのですが、東大合格者の多い学校の9割は、開成、灘、桜蔭、女子学院のような男女別学です。イギリスや韓国でも男女別学校の方が高い成績を修めていますし、今、アメリカでは男女別学クラスが急増しているのだそうです。アメリカでは、2002年に学力向上と学ぶ選択肢の拡大のためにNCLB法をつくり、1994年に4校しかなかった公立の別学校が現在540校に増え、学力向上に高い成果をあげています。

世界的になぜそのような傾向が出てきたかという点、第1に、最近の脳科学の研究により、生まれつき男女の脳には違いがあり、その違いにあわせて教育するとより伸びていくということがわかってきたからです。女子は言語能力が高く、男子は空間認知能力が高いのですが、それがPISA(OECDの学習到達度調査)でもはっきりとあらわれており、読解力は女子が良いのに対して、数学的な力、特にベクトルや空間図形などは男子が高くなっています。遺愛では理系希望者が60%を超える年もありますので、数学の時間数を増やし、時間をかけて数学の力をつける体制を整えています。共学だとどうしても男子にあわせて授業を進める傾向があるので、女子がついていけなくなってしまうことがよくあります。

第2に、勉強に集中出来る環境が整っていることです。12歳から18歳、あるいは15歳から18歳という人生の基礎をつくる時に、校内では、異性の目を気にすることなく集中的に、勉強、行事、部活動に取り組むことができる環境が別学にはあります。そのような中で、自分に自信をもつ生徒が多いようです。

第3に、別学では、自分らしくいられます。素でいられます。自分らしくふるまうことができます。そのなかで培われた友情は一生のものとなります。また、容姿で女性や男性が判断されるのではなく、その人の人間性そのもので評価されるのが別学です。日本でも別学が再び注目される時代が間違いなく来ると思います。

2010年8月17日

